

伊豆諸島における為朝一島々の共有財産としての為朝伝説

池田 雄二

1. 為朝の伊豆大島流罪と伊豆諸島全域支配

源為朝(1139-1170年)は源為義(1096-1156年)の8男で源頼朝や義経の叔父に当たる。強弓の名手で九州を平定したので鎮西八郎といわれる豪傑として知られる。為朝は1156年(保元元年)の保元の乱では崇徳上皇(1119-1164年。在位1123-1141年)側につき、敗れ、近江で逃亡療養中に土地の者の密告により捕縛された。しかしその勇猛を惜しまれ、処刑されずに再び弓を引けなように肩を外された上で、大島に流された。

その後の生涯については、保元物語、伊豆諸島各島や沖縄等に様々な形で伝わっている。例えば伝承の一例を挙げれば、伊豆諸島に配流された為朝の下にはかつての家臣、熊野・伊豆の水軍出身者、安房の漁民等も漸次集まり、為朝一行は諸島を回り、農牧漁業、造船、回船業の開発、馬術指導、生活習慣改善等に貢献した等と伝わる[野口]。

為朝関連の伝承が残る島は近代まで無人島だった式根島を除く8島にある。その数は、大体は島の規模に応じているといつてよいだろう。ただ御蔵島には為朝上陸がなかったと伝わる。

2. 大島での為朝の生活

(1)岡田上陸

為朝は島北方の岡田港、つかせっぱの浜に上陸したとされる。その磯には為朝足蹴の石があるという[大島町・「岡田港」、東京都教育庁大島出張所・23頁、大島観光協会・24頁]。また上陸腰掛けの石というものも嘗てはあったという[樋口・59頁]。

岡田での生活

為朝はネギドン(禰宜殿の意か)の屋敷に身を寄せた。その屋敷跡はネギドンの屋敷跡(禰宜殿の意か)といわれる(写真)。跡地は投棄物等で荒れている。その空地右手の家屋を挟んだ裏側に小祠がひっそりと建っている。藁細工等の神具も新しく、最近も誰かの手が入ったようだ。いぼっちゃ(後述)だろうか。



為朝は上陸した岡田を切り開いた。その土地をムハジョウブラという[東京都教育庁大島出張所・23頁、大島観光協会・24頁]。当時の大島には神社がなかった。そこで為朝は岩山を削り八幡神社を建立した。なおこの時、為朝は九重の巻物を持参していたそうで、それがご神体である[大島町・「八幡神社」、野口]。



一方で上記の通り、八幡神社の祭神が源氏＝為朝であることに怒った平家の神々が災いを起こすので、建立されたのが**龍王神社**である[大島町・龍王神社]。



元町での生活

為朝は大島流罪後、伊豆の領主狩野介茂光の家来で大島代官藤井三郎忠重に預けられた。代官所跡は**為朝の館跡**である(写真は**赤門**)。元町にある。

為朝がどのように理由で岡田から元町に移ったのかは判らない。また為朝は野増村に預けられたという伝承がある。当時の野増村は大島の祭政の中心地だった。為朝は薬師堂近辺に居住したという[野口]。それと岡田と元町の居住との前後関係もよく判らない。



ともあれ、代官の娘さくらえ江との間に2男1女をもうけたと伝わる。

流罪から10年も経つと、旧臣達が大島へ集まり始めた。このことが官軍による為朝討伐に繋がって行く。

この代官所跡は、現在のホテル赤門で、その敷地内には為朝が築いた**抜け道**と**物見台**がある。これは為朝が戦いに備えた遺構である[大島町・赤門]。抜け道は大変遠くまで繋がっていたそうである。それから**ちから石**がある。これは為朝がかつての弓勢を快復させるための鍛錬に用いたと伝わる[小石・158頁]。





ところで、ちから石と似た遺跡が三宅島伊ヶ谷にある。為朝の袂石と為朝の力水である(写真左と右)。

為朝の^{たもと}袂石は伊ヶ谷にある。傍に由緒書きがある。これによると、為朝が床几の梁にするために常に袂に入れて持ち歩いていたとされる。写真はペットボトルと映る袂石である。袂に入れるには余りに大きい。地元人でさえ腰掛石と間違えて覚えることもある。これだけの巨石だと為朝本人の怪力が耐えられたとしても服が耐えられま

い。三宅島から為朝伝説が現実離れしていくその一例である。

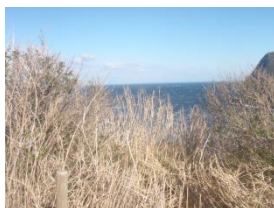
為朝の力水については大島とは全く扱いが異なる。周辺には何の標識もなく、案内もない。地元人もその存在を知らず、由来も伝わっていない。伊ヶ谷はかつて伊ヶ谷村があったが、1431年(永享3年)に村百姓一同による塩運上の不正が発覚して村民が逃亡して以来、廃村となった[浅沼・22頁、野口]。伝承が失われたことと関係しているだろう。



大島での生活の終わり

為朝は自害の前に子との最後の別れを逢父母の山(現大久保山)で行ったと伝わる。

為朝の最後の戦場は大島北端、乳ヶ崎である。ここは現在、為朝古戦場として史跡になっている(写真7)。身辺整理を済ませた為朝がここから討つ手の船に弓を放ち、胴腹を射通して沈めたという伝説は全国的に有名である。



この辺には平氏の兵が非業の死を遂げた業死の浜[東京都教育庁大島出張所・23頁]や生き残った平氏の軍勢は崖をよじ登ろうとし、積んであった木石を一気に落とされて全滅した崖、一ト落しの鼻がある[東京都教育庁大島出張所・23-24頁、大島観光協会・24頁]。

全国的に有名な伝説の場所だが、調査時点(2017年2月13日)では乳ヶ崎には「陸軍少佐 福井寛君之碑」がある他には何もなかった。この石碑の右手の小道を登った右手にかつては「鎮西八郎為朝古戦場の跡」と書かれた木柱が立っていたという[伊豆大島観光協会・4頁]。

なお為朝自身の自害は館でされたという[小石・160 頁他]。ただ一方で、為朝は大島を去って、その際に家来の者達に形見を与えた「そうめん絞りの由来」が語り継がれてもいる[東京都教育庁大島出張所・24 頁、大島観光協会・24 頁]。

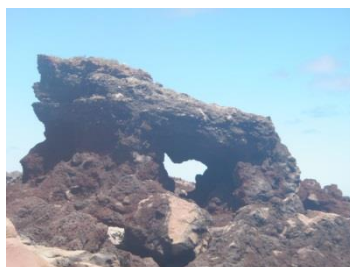
3. 大島以外に伝わる為朝強弓伝説

大島戦場ヶ原での伝説が最も有名だが、各島に為朝強弓伝説が伝わる。北から南へと紹介する。

(1)三宅島

為朝の打抜岩

島東南部坪田地区の磯にある下図の岩。為朝が 1km 以上遠く離れた切り通しから矢を放って磯の岩に大穴を開けたという。



(2)御蔵島

八郎畑

為朝が三宅島から放った矢が落ちた所であると伝わる[東京都教育庁大島出張所・23 頁]。三宅島から御蔵島までは 20km 以上の距離がある(戦艦大和の主砲の飛距離が 42km)。)

(3)八丈島

為朝の足跡:この話は大島とよく似ている。伝説によると、本土より八百余の船が攻め寄せた際、為朝は五人張りに 25 束の矢で大船を射破った。小舟は扇子で扇いで沈めたという。このとき、乗船していた島別当が為朝を攻めに來たのではないと弁解したのでこれを赦したという。戦の際、為朝が弓を射るために力を入れた足跡が残るといふ。

堀切

大賀郷と檜立の境にある峠。為朝が八丈島にいた当時、大賀郷から檜立へ通じる道が無かった。そこで「為朝様」が腰掛石から大弓で矢を射て、この山を射通した。そこに道が出来、大賀郷と檜立とが通じた。矢で掘り抜いたから堀切という。そこは切通しになっていて、両側の地層の筋を矢羽の跡だと伝えてきた。

4. 為朝と水

為朝と水、特に水源とを結びつける類似の伝説が多い。

(1)大島

刀研ぎ跡:下高洞遺跡近くの字金壺にある崖から滴り落ちる清水。その周囲が鉄錆色をして

いる。そのため為朝が刀を研ぎ、磨いた場所だと伝わる[大島観光協会・後掲・12頁]。そして為朝と水を結び付ける伝説は八丈島に多い

(2)八丈島

為朝の足跡傍の泉：末吉村に為朝の足跡があるという岩がある。その傍の泉は「為朝様」が八丈小島から八丈島に渡ってきたとき、この泉で足を洗った。そのためこの泉の水はいつも濁っている。刀研ぎ跡と似ている。その他の伝承は水源に関するもので、神通力のような話ばかりである。

源石：大賀郷にいた為朝は大変モテた。それで村の男衆の嫉妬を買った。そのため水止めをされて困った。そこで為朝は檜立村に向かったが、喉が渴いて困ったので、大石を杖の先で突いた。すると水が湧きだした。

コーブネノコー(川船の川)：大賀郷にある。東山麓にある薬師堂傍にある清水。「為朝様」が湧出させたという。忌服中の者や不浄の女が水を汲むと枯れた¹。ト部を呼んで祝詞をあげると回復した。この風習は消滅している。

メイルグドの堤池：中之郷にある。堀切の伝説で為朝が放った矢が落ちた場所が池になった。

また中之郷は五ヶ村の願事という伝説の中で同村は為朝に水を願ったので、五ヶ村で最も水が多い、という伝説もある。

ハテヒノカワ：末吉にある。「為朝様」が矢筈あるいは杖で突いて水が湧出したという。

タチモトの泉：三根にある。為朝が矢で突いて水が出たという。

サコーノコー：同じく三根にある。「為朝様」が喉が渴いたので矢の根で地を突いて出したという。

5. 各島に残した現地妻や子孫

(1)大島

為朝は大島流罪後、大島代官藤井三郎忠重に預けられ、その娘^{きつらえ}熊江との間に2男1女をもうけた。長男は為頼といい、官軍討伐時に為朝が刺し殺している。ただ次男為宗(為政)と娘は妻が抱いて逃げたと伝わる[小石・158-160頁]。

大島では茅で作られる小祠をいぼっちゃという(写真。八幡神社境内)。これは平家系武将の為朝討伐時に為朝の娘が身を隠したものという伝承がある。

¹為朝と水と女の不浄を関連づける伝説は、伊豆諸島には他に見当たらないが、沖縄にある。為朝は伊豆諸島から沖縄に行き、大里按司の娘を娶り、尊敦という子をもうけ、その子が舜天という琉球王になったという伝説がある。為朝は妻子を連れて帰郷しようとするが、2度海が荒れ、引き返した。船乗りが女性が船に乗ると、竜宮の神が怒り、海が荒れるというので、妻子を降ろして1人で帰ったという伝説件がある(首里王府・中山世鑑・後掲・51-52頁)。



藤井家は今も続いていて、ホテル赤門がそれである。当代 40 代である。なお為朝が残した家族の伝承は、大島以外の伊豆諸島では新島、三宅島、八丈島に残る。大島以外では沖縄に残る。

(2)新島

為朝は羽伏(はぶし)浦に上陸し[新島本村教育委員会・為朝神社、野口]、雌雄の雉子に案内され、島名主の土屋平右衛門の家に入り、同家に滞在し、滞在中に平右衛門の娘丹千代との間に一子を儲けた。土屋家は現在、青沼家として存続している。為朝が新島を去る際、直筆画像²、差料一刀を残し、生まれた子が男であれば、この刀を持って会いに来るように」と言い残したと伝わる[新島本村教育委員会・為朝神社、樋口・102 頁、野口他]。ただ子の性別は明らかではない。

(3)三宅島

為朝の官軍討伐後に三宅島に上陸し、島方取締役壬生右兵衛尉実一が饗応し、伊ヶ谷地区の城山に館を建てて 3 年間滞在した後に八丈島に渡ったという³。妻等の家族をもうけたという伝承は伝わっていない。ただ伊ヶ谷村は室町時代に廃村になっているので、途切れた伝承がある可能性はある。

(4)八丈島

宗福寺住職は代々源姓を名乗る。為朝の子孫だという。為朝の妻や設けた子の話は伝わっていない。ただ当時、為朝は大変女性にもてたという話は大賀郷や檜立に伝わっている(「八丈島と為朝傳説」・「源石」「為朝の船造り」)。

(5)虎正と大三郎

為朝は御蔵島には上陸していないとされるが、近海に虎正の根と大三郎の根がある。どちらも為朝の子とされる。虎正は驚異的な弓の技術を持っており、これに驚いた為朝に斬り殺された。官軍討伐後のことである。大三郎は不詳である[広瀬・後掲・虎正の根]。また八丈島、八丈小島にも虎

²八丈島の高橋・30-32 頁も為朝が書写させた自画像について記述する。

³BIRDER 編集部・10 頁および三宅島・為朝の袂石由来、野口・後掲。また八丈島の高橋與市「園翁交語」・30 頁によると、三宅島に渡った為朝は幽かに遠島が見えたので、木を穿って舟を作り、自ら棹さして1日1夜で八丈島に到着したと伝わる。

政が海という為朝子殺し伝説が伝わっている[高橋・後掲・34-36 頁]。ただどれも誰とどこの島で設けられた子であるのか伝わらない。

5. 現代に残る風習

(1)大島

岡田八幡神社の正月祭

1月15日に実施される。祭事では天古舞^{てこまい}が舞われる。若衆がハッピーと股引姿で梶子を用いて木遣りに合わせて舞う。その由来は、為朝がテコを用いて溶岩を取り除いて村を開き、八幡神社を建てた時に木遣音頭を歌いながら氣勢をつけた伝説に因む[樋口・56-57 頁、大島町・八幡神社]。

御面談と称する神子舞がまず踊られる。これは笛で為朝霊と噴火神を呼ぶ。舞に続いて奉納手踊が行われる[野口]。

道拓きの神事

為朝流罪当時の島民は磯での砂取りの他知らなかったのも、為朝は島民に農耕を教え、畠に通う道を拓いたという故事がある。この故事による道拓きの神事が岡田の八幡神社にある[東京都教育庁大島出張所・23 頁、大島観光協会・24 頁]。

為朝まつり

元町で9月下旬から10月初旬に実施される。この祭りには為朝の子孫である藤井家当主も参加する[樋口・59 頁]。

為朝神社の屋根葺き替え神事

ホテル赤門敷地内にある為朝神社は茅で作られており、では屋根の葺き替え神事が行われる。最近では2018年4月8日に行われた。



ためともさん

大島の女性と結婚して本州などから大島に移り住んだ男性を為朝にあやかって「ためともさん」と呼ぶ。

(2)利島

八幡神社の流鏝馬神事

為朝がまつば山で流鏝馬をしたという故事に由来して、800年間流鏝馬神事が続いている。当たった矢が山に近いかに海に近いかに、的に当たった矢の数によって山側の矢では豊凶、海側の矢で

は大漁不漁を占う[樋口・後掲・91 頁]。

(3)新島

青沼家敷地内に**為朝神社**がある(写真 10)[新島本村教育委員会・為朝神社、樋口・102 頁]。



為朝が新島を去った9月13日に**為朝神社の祭り**がある。雌雄の雉子の剥製、神息(かみひろ)という刀等による祭事が行われ、村民もお参りをする。ヤカミ衆という巫女が為朝の霊を呼び出し、「もといさみ」で為朝神を讃え、「神いさめ」で豊漁、「若松様」で家内安全、村繁盛を祈願する。最後に「八丈踊」(室町から江戸時代の風流)で「はんやな 八丈島にすむ殿は風をたよりに岸をするかつぐ袖なり・・・」(八丈島に住む為朝が風を頼りに新島に近づいてくるとの願いを込めている)と丹千代の為朝への恋慕が歌われるという[新島本村教育委員会・為朝神社、樋口・102 頁、野口]。

また**為朝が残した為朝自画像への護持弓、羽羽矢**(ははや⁴奉献という風習がある。為朝自画像には靈験があるといわれ、護持弓と羽羽矢を献じて精誠をこらすときには感応に預からないことはなかったという[高橋・園翁交語・30-32 頁。ただし記述が明治時代の八丈島人、高橋與市によるので、現代でも存続する風習かどうかは不明]。

氏神十三社神社の**為朝御霊社**

為朝は新島に尽くしたといわれ、氏神十三社神社に**為朝御霊社**が合祀されている[野口]。ここへはお銭米袋を持ってお礼参りする古老達の姿が絶えないという[野口]。

(4)神津島

ほうそう神様



神津島では為朝が同島を支配したという伝承は伝わるが、明確な為朝関連史跡が存在しない。このほうそう神様も島民は為朝を祭ったものだと認識していないようだ。神津島村郷土資料館館員へのヒアリングでも同様である。同神社前にある由緒書き[神津島村・ほうそう神様と花正月]に

⁴羽羽矢とは、①大蛇のような威力ある矢、②大蛇を倒す矢、③羽の広い矢。

為朝に関する記述は一切ない。しかし為朝を祀ったものだとする大島関係者による文献がある[東京都教育庁大島出張所・23 頁、大島観光協会・154 頁・24 頁]。この神社では1月 14 日に子供らの無病息災を祈る行事が行われる。

(5)三宅島以南

三宅島や八丈島には為朝関連史跡が多いが、祭祀は存在しない。

ただ八丈島には旧家に為朝図が保管されていたり、資料館によく似た為朝図(昭和 30 年代作成)がある。



地元民にきくと、祭りがあれば違うだろうが、為朝信仰が強いということはないという。有人島時代の八丈小島ではかつて同島の八郎神社の祭礼があり、本島からト部がきており、祭礼米が納められていたが⁵、同島出身者がいうには為朝伝説を言い聞かされて育ったということはないという。ただ同社の札を貰いに来る人がいたという。また同社にあった為朝の鎧と剣は触れることが許されず、年一度みせられたという(浅倉氏)。

また御蔵島と八丈島との海に為朝が子である虎政を殺害し、投げ捨てた海があり、そこを航海する際には供え物をするという。

【附録 伊豆諸島為朝関連立札等翻刻集】

[大島町「赤門」。赤門前の立札の翻刻]

赤門

弓の名人といわれた鎮西八郎源為朝が、保元の乱に敗れて捕えられ、大島に流され住んでいた館の跡と伝えられる。後に代官屋敷となったところともいわれ、為朝のため特に許されたという格式ある朱塗の門から通称「赤門」と呼ばれている。

屋敷内には戦いに備えたという物見台、抜け穴などもあり、奥まった木立の中には「為朝神社(頭殿コウトノ神社)」がある。

⁵南海タイムス・2018年7月27日・9面。

平成五年三月

大島町

[大島町「岡田港」。「海の見える丘」横の立札の翻刻]

岡田港

この岡田港は、大島の北の玄関口で、風向きによって岡田港と元町港を使い分けております。この港は昔から天然の良港として栄えてきたところで、今も坂の多い町並みに昔日のおもかげがしのばれ、林芙美子は「大島行」のなかで、岡田港の景観を「まるでナポリの漁師町と似ている」と書いています。

また源為朝が大島に流されたとき上陸したのがこの地といわれ、源氏一統の御守護の巻物を収納する為に建立したと伝えられる八幡神社もあり、為朝にまつわる伝承も多く残っています。

平成八年三月

大島町

[大島町「鎮西八郎為朝」。役所前の立札の翻刻]

鎮西八郎源為朝

骨肉争う「保元の乱(一一五六)」は後白河天皇方の勝利に終わり、源為朝(一一三九～七〇)は父為義とともに崇徳上皇を奉じて脱出した。その後、崇徳上皇は捕えられて讃岐の松山に流され、また為義をはじめ上皇方についた武士はすべて処刑された。だが、為朝は近江国(滋賀県)へ逃れ、戦乱で受けた傷を療養中、土地の者の密告により捕えられた。本来ならば当然死刑になるはずであったが、これだけの勇士を殺すのは惜しいと命だけは助けられた。そして再び弓を引くことが出来ないようにと腕の筋を切られて大島に流された。大島での為朝は、島代官の娘を妻とし、病気が快復すると大島はもとより、伊豆七島を次々と討ち従えた。流人の身でありながら七島を股にかけ、勢力を張りはじめた為朝を討つため、嘉応二年(一一七〇)伊豆介狩野茂光の追討軍が大島に攻め寄せた。為朝は手勢とともにこれを迎えて戦ったが、衆寡敵せず、三十二歳の若さで自決して果てた。

流謫るたくの地において威を振り、討伐にあって滅びたという為朝にまつわる伝説は、伊豆の各島に今なお残されている。

史跡としては、この「為朝館やかたの跡」をはじめ、長根浜公園の「為朝の碑」、追手の軍勢を迎えうち、わずか一本の矢で軍船を沈めたという「乳ヶ崎」や「碁石浜」などが有名で、特に岡田に為朝の伝承が多く残されている。

ちなみに、鎮西八郎源為朝の「鎮西」とは、九州落ちした為朝が、わずか三年のあいだに、数十か所の城を攻め落として九州すなわち日本の西部を平定したのが由来である。

平成五年三月

大島町

[大島町「八幡神社」。八幡神社前の立札の翻刻]

八幡神社

岡田には、鎮西八郎源為朝の伝承が多く、この神社も為朝が建立したと伝えられている。御神体は保元の乱に敗れた為朝が大島に配流された際に奉じて来た「九重の巻物」であると言われ、氏子は「開かずのお箱」と称して開けると目がつぶれると言いつたといわれている。一月十五日実施される「岡田八幡神社の正月祭で奉納される「天古舞」は、若衆が、ハッピ、股引姿で梶子を用いて、木遣りに合わせて舞うもので、昔為朝がテコを用いて溶岩を取り除いた縁起によるもので、全国的に例のない珍しいものです。昭和三十三年東京都無形民俗文化財に指定された

平成四年三月

大島町

[大島町「龍王神社」。龍王神社前の立札の翻刻]

龍王神社

この龍王神社については、次のようなことも言われている。
「⁶それは八幡神社の祭神が源氏であることから平家の神々が怒って災害を起すので、ここに龍王神社が祀られた。(一説には、安徳天皇が祀られているとも言われる。)そのため龍王神社の祭礼には、八幡神社と同じように『テコ舞』や『手踊り』が奉納されるのである。
岡田の大きな災害は、大正十二年(一九二三)関東大震災の折、津波のため繋舟が民家の二階に押し上げられたり、崖崩れのため死者を出したが、それより以前元禄十六年(一七〇三)十一月二十二日夜、大津波で回船、漁船共十八艘、男女五十四人、外に流人二人、屋敷五十八軒、浪に取られたということが古い記録にみられる。岡田港の海食崖では崖崩れが起きたりしているが、龍王神社は、創建以来災害を受けたことがないと言われている。

平成四年三月

大島町

[神津島村「ほうそう神様と花正月」。ほうそう神様前の立札の翻刻]

ほうそう神様と花正月

⁶制作ミスか、この一重鉤カッコの閉じ()がない。

正月の十四日を神津島では花正月と言い、子供らの無病息災を祈る行事が行われる。
この日は家毎に石臼で米の粉を挽き、直系三 cm ほどの団子を作り、蒸し上げてから竹の小枝に
数個をさし、花の付いた椿の小枝と共に子供の数ほどを神棚に供えておく。
やがて、学校や保育園から帰って来た子供らは、神棚の団子と椿の小枝を持ち、それぞれこの
「ほうそう神様」へお詣りに出かけて来る。
神前へ供え手を合せたお詣の後、椿の小枝は残し、団子だけを下げて食べると、ほうそう神様の
裏山へ登り、手に手に「トベラ」の枝を折り取って家へ持ち帰る。
家では、年寄達が持ち帰ったトベラの枝を囲炉裏の中へ呪文を唱えながらくべる。
火の中でトベラは、はげしい音とともに、異臭と青白い煙を出し葉肉から気泡が出ては消えながら
燃えていく。
このことにより、天然痘にかからない呪ないとした。
天然痘がなくなった現代もこの行事は続いていたが、生活様式が変わり、囲炉裏がなくなったの
でトベラを持ち帰り燃やすことはなくなった。
島では、トベラのことを「シッチリ・バッチリの水」と呼んでいる。
それは、この木が火の中で燃える際、チリチリ、バチバチ、と独特の音を出すからです。

昭和五十六年三月 神津島村

[著者不明「いぼっちゃ」(作成年不明、2015年2月13日撮影)。大島八幡神社境内の小祠い
ぼっちゃ横立札の翻刻]

いぼっちゃ
この茅の小祠は、いぼっちゃと呼ばれ、昔は旧家の屋敷神として各家庭で祀っていたが、明治以
降はここに遷されコンクリートの祠に代った。
いぼっちゃは、結い芋舎、庵っ舎が訛ったことばとされているが定かではない。源為朝が居を定
めた場所を記念して村人が結んだとも、為朝の子女が平家の攻め手から身を守るための隠れ家の
跡であるとも伝えられている。

[著者不明「為朝神社」(作製年不明、2015年2月13日撮影)。大島為朝神社前立札の翻刻]

為朝神社(香殿神社)

流罪となった為朝はその身柄を預けられた島代官藤井三郎大夫忠重の娘を妻とし、大島のみな
らず他の島々にまで勢力を張ったため、朝廷の命により為朝討伐の軍船が大島に攻め込んだ。
為朝はこれを迎えうち一戦を交えるが衆寡敵せず、遂には自刃して果てる。
以来八百余年、代々藤井家の氏神とし、また、その武勇をたたえる島民の信仰をあつめて現在
にいたる。

[利島村教育委員会「八幡神社」。八幡神社の立札の翻刻]

八幡神社

御祭神 応神天皇
配祀神 仲哀天皇

祭礼 例 祭 一月一日 流鏝馬神事 一月一日
年の日祭 一月二日以降の初寅日(当神社の干支は寅)

由来沿革

創建年代及び由来沿革は不詳で島名が、天正十二年(一五八四年)の八幡神社最古の棟札が阿豆佐和気命神社社務所に保存されている。当神社にはかつて、村の男が参加する八幡講があり、講元は世襲で梅田太郎左衛門であった。

流鏝馬神事

流鏝馬神事は、元日の午前中八幡神社境内でおこなわれ、「歩射」の形式を取りその型は古式の「賭弓の御式」に則ると言われる。伊豆諸島では利島のみが存在し、伝播の時代経路は不明である。

十二月二十二日から忌籠りと潔斎の内に準備と稽古を重ねた。弓を射る早矢・追矢の若者と矢取りの少年の三名の的衆によって行われ、射る矢の方向で一年の吉凶を占う。北(海)の方角に矢が行くときは豊漁、南(山)の方角に行くときは畑作が良好とされ、大きく矢が的を越していくときは、何か異変が起きると言われる。

利島の流鏝馬は、古来より続く行事であるが、元々は当所より百メートル程西の的場山と呼ばれる所に専用の祭場があり、神社の祭式とは係わり無く執り行われていたと言いつた伝えられている。

昭和二十七年以来、若者の出島による奉納者の不足や経済的負担を理由に中断していたが、昭和五十一年三月に「利島流鏝馬保存会」が発足し、翌五十二年一月一日二十五年ぶりに復活奉納された。以後八幡神社に於いて四年ごとに行われている。

中断していた昭和三十三年、「東京都指定無形民俗文化財」に指定された。

八幡神社境内祭祀遺跡

平成六年に八幡神社本殿の建築工事中に斜面に形成された帯状を呈する集石遺構が発見され、七年に早稲田大学谷川彰雄教授によって調査された。帯状集積遺構は板石(板状節理の玄武岩)を配した祭祀遺構で全体を上部まで礫石で覆うように埋められた状態で検出され、和鏡五面、双孔儀鏡、銭貫、渥美、常滑、瀬戸産の陶磁器、鉄製品などが出土した。堂山神社境内祭祀遺跡の出土物とほぼ同様の内容であり、年代も同じく、十三世紀前半から十六世紀後半にわたると鑑定される。遺跡の石材は全て、海岸から搬入されている。

同九年に本殿の南西隣の玉石垣に沿って、八幡神社境内祭祀遺跡発掘調査団により調査された。断片的資料ながら古墳時代に遡る土師器、また帯状集石遺構の遺物との関係は不明であるが、堂山神社境内祭祀遺跡と共通な中世の古瀬戸・常滑産の陶器による祭祀状況、陶製弓に刀剣、双孔儀鏡、銭貫を混在させた近世(十七～十八世紀)の祭祀状況等を検出した。

平成十七年三月 利島村教育委員会

[新島本村教育委員会「為朝神社」(作製年不明、2013年8月30日撮影)の翻刻]

為朝神社

平安時代末期の武将、源為朝は、保元の乱(一一五六)で父為義と崇徳上皇側について敗れ、十八才で大島に流された。

その後、伊豆の島々に渡り、これを従えたが、国司の追討を受けて大島(一説では、八丈小島)で果てたと伝えられている。

言い伝えによると、新島に渡った為朝は羽伏浦から雌雄の雉子に案内され、島の名主、土屋平右衛門家に入った。滞在中、娘丹千代との間に一児をもうけ、直筆の画像や、差料一刀を形見の品とし、前田七兵衛持船の廻船天神丸で、その年の九月十三日に八丈島に渡海した。

同家の末裔青沼家では、この日を為朝の祭日と定め、雌雄の剥製雉子、画像、神息^{かみひろ}(刀)等を掲げ、今もなお祭祀を続けている。

新島本村教育委員会

[三宅村「為朝の袂石由来」(制作年不明、2014年8月20日撮影)。為朝の袂石横立札の翻刻]

^{たもと}いし
為朝の 袂 石 由来

鎮西八郎為朝は源氏の宗家、鎮守府将軍八幡太郎義家の嫡孫、六条判官源為義の八男である。

保元元年(一一五六年)官廷における新院と本院との争い(保元の乱)にあたって為朝は父為義に従って新院方に組したが破れ、父為義は斬られ為朝は伊豆大島に流罪を科せられた(一八歳)。

野に放された自然児は若年ながらこの島で頭角を現し、近隣の島々をその膝下に抑え島の頭目と評された。伊豆の領主狩野大介茂光は為朝の振舞に我慢がならず、これを攻めたが一国領主と流人の力くらべは論ずるまでもない。為朝は郎党を連れて三宅島に難を逃れた。永万元乙酉年三月(二七歳)であり、大島に送られて九年目のことである。(三宅島古記録に島方取締役二四代壬生右兵衛尉実一、為朝を迎える饗応し、為朝はやがて八丈島に渡ったとある)

為朝は伊ヶ谷地内の城山に館を築き八丁礫の喜平次等郎党と共に住んだ(以来この城山地区が大屋敷と呼ばれるに至った)

源為朝は豪勇無双で強弓を引いたことは夙に知られるが、この袂石は床几の梁にするため、常に袂に入れて持ち歩いたところから袂石の名がつけられた。中央にくぼみがあって座り心地がよく少し雨が降った場合でも、水が溜まらないように横に細い溝がついている。

乱世に生きた薄幸の英雄が三宅島に残した唯一の遺品である。

三 宅 島

【参考文献】

- 浅沼悦太郎『改訂増補 三宅島歴史年表 附 伊豆諸島』4版(浮田道照、1981年)。
今川了俊「難太平記」塙保己一『群書類従 第拾四輯 合戦部』(経済杂志社、1894年)巻398(1402年)693頁以下。
大島観光協会『伊豆大島 地域資源情報《詳細》』(大島観光協会、2015年)。
岸谷誠一校訂(著者未詳)『保元物語』(岩波書店、1934年、初出承久以前)。
小石房子『流人100話』(立風書房、1988年)。
近藤富蔵『八丈實記』全七巻(緑地社、1964-1976年)。
坂詰力治、関明子、池原陽斉、大村達郎編『半井本 保元物語 本文・校異・訓釈編』(笠間書院、2010年)。
首里王府編『訳注 中山世鑑』諸見友重訳(榕樹書林、2011年、初出1650年)。
高橋與市「園翁交語」八丈島の古文書を読む会『八丈島の古文書集 第一集』(南海タイムズ、2012年、初出1886年)15頁以下。
同2「舊昔綜嶼嘶話」八丈島の古文書を読む会『八丈島の古文書集 第一集』(南海タイムズ、2012年、初出1819年)123頁以下。
滝沢馬琴『椿説 弓張月』丸屋おけ八訳(言海書房、2012年、初出1805-1811年)。
寺島良安『和漢三才図会』(平凡社、1985-1991年、初出1712年)。
東京都教育庁大島出張所『島の史跡 続大島編』(東京都教育庁大島出張所、1988年)。
徳川光圀『譯文大日本史 一～五』3版(国民文庫刊行会、1914年、初出1657-1906年)。
野口啓吉「はんやな 八丈島に住む殿は・・・」南海タイムズ 1998年1月1日。
林道春『本朝神社考』(改造社、1942年)。
樋口修司『伊豆諸島を知る事典』(東京堂出版、2010年)。
広瀬節良『みくらかたり』(御蔵島観光協会、2015年)。
本山桂川『嶋と嶋人』(八弘書店、1942年)。
BIRDER 編集部『BIRDER SPECIAL エコツアーリズムで三宅島復興！三宅島の自然ガイド』(文一総合出版、2007年)。

【web 資料】

- ホテル赤門「ホテル赤門 伊豆大島」< <http://www.ooshima-akamon.com/> >2016年7月19日最終アクセス。